SOMPO美術館
Sompo Museum of Art

Press Release

表紙：ジャン＝バティスト・カミーユ・コロー
《湖畔の木々の下のふたりの姉妹》（部分）
1865-70年　油彩/カンヴァス　67.4×47.6 cm
Inv.887.3.82　ランス美術館
© MBA Reims 2019/Photo : C.Devleeschauwer

ランス美術館コレクション

風景画のはじまり
コローから印象派へ

フランス、シャンパーニュ地方のランス市は、歴代国王の戴冠式が行われた歴史とともに、その名の通りシャンパーニュ（シャンパン）の産地として知られています。その街の中心に建つランス美術館は、19世紀の風景画コレクションが充実し、とりわけカミーユ・コローの作品は、ルーヴル美術館に次いで数多く所蔵されています。本展では、ランス美術館のコレクションから選りすぐりの名品を通じて、コローやバルビゾン派に始まり、印象派でひとつの頂点に達するフランス近代風景画の展開をたどります。

西洋美術において風景画は、神話画や歴史画の背景に過ぎなかった自然が、絵の中心として描かれることで誕生しました。やがて近代化を迎えた19世紀フランスにおいて、鉄道網の発達、チューブ式絵具の発明、また新興ブルジョワジーの台頭などを背景に、風景画は新たな展開を遂げます。戸外制作を積極的に行った画家たちの眼差しを通して捉えられた自然の姿は、生き生きと、実に様々に表現されました。そうした新たな流れの先駆者であるミシャロンやベルタンにはじまり、コロー、バルビゾン派、ブーダン、そしてルノワール、モネ、ピサロら印象派の作品を中心に、油彩、版画など約80点で構成する展覧会です。

展覧会名　ランス美術館コレクション　風景画のはじまり　コローから印象派へ
会　　期　2021年6月25日（金）～9月12日（日）
会　　場　SOMPO美術館
〒160-8338 東京都新宿区西新宿1-26-1
休 館 日　月曜日（ただし8月9日は開館、翌10日も開館）
開館時間　午前10時から午後6時（最終入館は午後5時30分まで）
観 覧 料　一般1,500円、大学生1,100円、高校生以下無料
※身体障がい者手帳・療育手帳・精神障がい者保健福祉手帳を提示のご本人とその介助者1名は無料
被爆者健康手帳を提示の方はご本人のみ無料
主　　催　SOMPO美術館、朝日新聞社
協　　賛　損保ジャパン
後　　援　在日フランス大使館 / アンスティチュ・フランセ日本
協　　力　日本航空
企画・監修　ランス美術館
Exposition produite et gérée par le Musée des Beaux-Arts de la VILLE DE REIMS EN FRANCE.
企画協力　ブレーントラスト
ホームページ　https://www.sompo-museum.org/
お問合せ　050-5541-8600（ハローダイヤル）
アクセス　新宿駅西口より徒歩5分

Reims.fr　MUSÉE DES BEAUX-ARTS　AMBASSADE DE FRANCE AU JAPON　INSTITUT FRANÇAIS アンスティチュ・フランセ日本 Japon

ランス美術館の風景画コレクションが来日

ランス美術館は、19世紀絵画のなかでもとりわけ風景画コレクションが充実しています。特にカミーユ・コローの作品は、フランス国内ではルーヴル美術館に次ぐ規模を誇ります。

フランスにおける近代風景画の成立過程を余すことなく展観

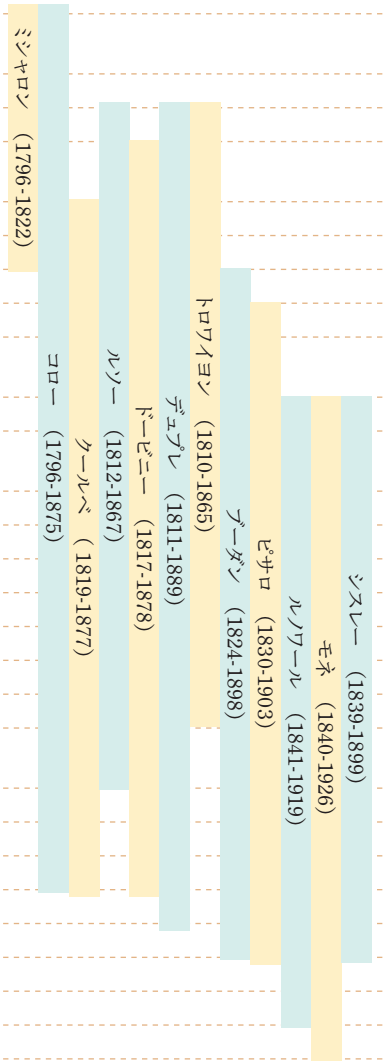
フランス近代風景画の成立過程を、19世紀の主要画家の作品を通じてたどります。関連する資料や版画もあわせて展示します。

19世紀フランス絵画の巨匠たちが一堂に

近代風景画の先駆者ミシャロンやベルタンにはじまり、コロー、クールベ、バルビゾン派、ブーダン、そして印象派のモネ、ルノワール、ピサロら、19世紀フランス絵画の巨匠たちが勢揃いします。

略年表

1800	ピエール=アンリ・ド・ヴァランシエンヌが風景画の重要性を説き、パリ近郊での風景スケッチを奨励。
1804	ナポレオンが皇帝に即位、第一帝政成立。
1814	ナポレオン退位、ブルボン朝による王政復古。
1817	美術アカデミーのローマ留学賞に、歴史風景画部門が新設。ミシャロンが受賞。
1821	フォンテーヌブローの森に画家たちが集まり始める。
1822	コロー、ミシャロンに弟子入り、その後ベルタンのアトリエで3年間学ぶ。
1825	コロー、第1回イタリア旅行、1828年頃まで各地を訪れる。
1830	パリで七月革命が勃発、立憲君主制による七月王政が成立。
1835	コロー、バルビゾン訪問。この頃よりルソー、ディアズらは、しばしばバルビゾンを訪れる。
1841	チューブ入り絵具の発明。
1843	パリ―ルーアン間の鉄道が開通。1847年にはル・アーヴルまで延長。トロワイヨン、オランダやベルギーに滞在、動物画が名声を得始める。
1848	二月革命、ルイ=ナポレオンが大統領に就任。第二共和政成立。
1849	パリ―リヨン間の鉄道開通（フォンテーヌブロー経由）。
1852	ルイ=ナポレオン、皇帝に即位。第二帝政成立。
1853	コロー、この頃よりクリシェ・ヴェール（版画）を制作。
1857	ドービニー、アトリエ船ボタン号でセーヌ川、オワーズ川沿いの風景を描く。
1858	モネ、ル・アーヴルでブーダンに出会い初めて野外で写生を行う。
1862	腐食銅板画家協会の結成。
1866	この頃より、マネ、ピサロ、モネ、シスレー、ドガ、ルノワール、セザンヌらがカフェ・ゲルボアに集まる。
1870	普仏戦争勃発。翌年、パリ・コミューン、第三共和政成立。
1872	モネ、ル・アーヴルに滞在、《印象、日の出》を制作。
1874	第1回印象派展開催。
1886	第8回（最後の）印象派展開催。モネ、ベリール島に滞在。
1897	ピサロ、以後、パリの都市景観をテーマにした作品を手がける。
1914	第一次世界大戦勃発。
1919	ドイツのワイマールにバウハウス設立。モーム『月と六ペンス』出版。
1926	ポアンカレ内閣成立。リュクサンブール美術館、印象派を中心とする展示となる。



第1章

コローと19世紀風景画の先駆者たち

Corot et les précurseurs du paysage au XIXème siècle

フランスにおいて「風景」が絵画の主題として認められるには、18世紀末まで待たなくてはなりません。芸術の崇高化を目的とした美術アカデミーでは、高い教養を必要とするギリシャ・ローマ神話や聖書の物語、あるいは神や人間の営みを描いた「歴史画」が、絵画の分野では最も高尚なものと考えられていたからです。しかし18世紀末から19世紀初頭にかけて、歴史画の背景として描かれていた風景に注目が集まり始めます。この動きは革命を中心とした社会の変化、新興ブルジョワジーの台頭、ロマン主義や写実主義等の芸術分野における自然への関心、産業革命と都市化による田園風景への憧れなど、その当時生まれた新しい価値観と深く関わっていると言えます。こうして1817年、美術アカデミーに「歴史風景画部門」が新設され、ジョルジュ・ミシェル、アシル＝エトナ・ミシャロン、ジャン=ヴィクトール・ベルタンら風景画家が活躍します。彼らは戸外で風景を観察し習作やスケッチを制作、それらをもとにアトリエで最終的な「風景画」を完成させました。

a. | b.
c. | d.

a. アシル＝エトナ・ミシャロン （1796-1822）

❶《水車小屋のある風景》

1814-16年　油彩/カンヴァスに裏打ちされた紙
37.5×26.4 cm　Inv. 2000.3.1　ランス美術館
© MBA Reims 2019/Photo : C.Devleeschauwer

ミシャロンは、優れた観察力と描写力に恵まれ、この作品でも各部分にその才能を垣間見ることができます。ミシャロンは戸外で習作やスケッチを行い、それらを元にアトリエで作品を完成させました。この作品もフランスやヨーロッパを旅した際の記憶を元に、アトリエで仕上げられたものです。ミシャロンはカミーユ・コローが最初に師事した画家ですが、1922年、コローが師事して間もなく、肺炎のため26歳の若さで亡くなりました。

b. ジャン＝バティスト・カミーユ・コロー (1796-1875)

❷《突風》

1865-70年　油彩/カンヴァス　47.4×58.9 cm
Inv. 899.16.23　ランス美術館
© MBA Reims 2019/Photo : C.Devleeschauwer

c. ジャン＝バティスト・カミーユ・コロー

❸《湖畔の木々の下のふたりの姉妹》

1865-70年　油彩/カンヴァス　67.4×47.6 cm
Inv.887.3.82　ランス美術館
© MBA Reims 2019/Photo : C.Devleeschauwer

高くそびえたつ樹木の下に、ふたりの姉妹がくつろいでいます。樹木の間から湖面が、さらにその奥には対岸の街並みが見えています。手前に小さく人物を配し、画面を前景、中景、後景と明確に区別するなど、伝統的な画面構成にのっとっていますが、一見すると何気ない日常的な風景が樹木を中心とする自然と共に、コローならではの詩情あふれる場面として描かれています。

d. ギュスターヴ・クールベ （1819-1877）

《レマン湖の岸辺（急流）》

1875年頃　油彩/カンヴァス　61.5×50.1 cm
Inv.907.19.73　ランス美術館
© MBA Reims 2019/Photo : C.Devleeschauwer

Column

ジャン＝バティスト・カミーユ・コロー

裕福な織物商の家に生まれ家業を継ぐはずでしたが、20代半ばを過ぎてから画家になることを決意、26歳の時に風景画家アシル・エトナ＝ミシャロン、次いで同じく風景画家のジャン＝ヴィクトール・ベルタンに師事しました。イタリアやフランス各地を写生のために旅行し、実際の景色に基づきながら、自然の一場面を詩情あふれる風景画として描きました。コローが作品を完成させたのはアトリエでしたが、《突風》のように、まるでその場にいたかのような臨場感あふれる作品も描いています。ランス美術館には、フランス国内ではパリのルーヴル美術館に次いで多くのコローによる油彩画が所蔵されています（27点）。本展覧会では、その中から16点が出品されます。

※❶〜⓫広報用貸出画像

第2章 バルビゾン派
L'Ecole de Barbizon

1820年代から30年代にかけて、パリから約60キロメートル南東に位置するフォンテーヌブローの森に、多くの画家が集まりました。彼らの目的はフォンテーヌブローの森の自然を直接観察し、風景画として描くことでした。画家たちは隣接する村バルビゾンに滞在、あるいは定住してアトリエを構え風景画を制作、彼らはこの村の名にちなみ、「バルビゾン派」と呼ばれるようになりました。バルビゾン派の画家の多くは、それまでの風景画家同様、戸外での制作はスケッチや習作にとどめ、サロンに出品するような最終的な大作はアトリエで完成させていました。しかし自然を客観的に見つめ、物語性を排除した写実的な風景画を制作する姿勢は、1860年代、同じくフォンテーヌブローの森に集い戸外制作を試みた画家たち、クロード・モネ、ピエール=オーギュスト・ルノワール、アルフレッド・シスレーら、後に印象派と呼ばれる画家たちへ受け継がれていきました。

e. f.
g.
h.

e. テオドール・ルソー （1812–1867）
❹《沼》

1842–43年　油彩/カンヴァス　41.1×63.3 cm
Inv. 907.19.227　ランス美術館
© MBA Reims 2019/Photo : C.Devleeschauwer

ルソーは17世紀オランダの風景画に学び、早くから戸外で写生を試みました。1820年代中頃からフォンテーヌブローの森を訪れ、1836年にバルビゾンに移住しアトリエを構えました。この作品はフランス中部に位置するベリー地方の風景を描いたものです。前景に人物を配することで奥行きを強調し、草地が広がる前景と木々が並ぶ背景を対比させ、堂々とした大地の広がりを表現しています。

f. シャルル＝フランソワ・ドービニー （1817–1878）
《風景、雨模様の空》

1865年　油彩/板　30.9×49.3 cm
Inv. 907.19.79　ランス美術館
© MBA Reims 2019/Photo : C.Devleeschauwer

ドービニーは風景画家の父から絵を学んだ後、歴史画家のポール・ドラローシュ（1797–1856）に師事しました。初めは歴史画家を目指していましたが、1840年代頃からフォンテーヌブローの森で制作、1850年代にはコローと写生旅行を行いました。1857年からアトリエ船「ボタン号」でセーヌ川やオワーズ川を巡り、水辺の風景を描きました。光や水の揺らめきを軽やかな筆づかいで表現した手法は、次世代の印象派に大きな影響を与えたと考えられています。

g. ジュール・デュプレ （1811–1889）
❺《風車》

1835年頃　油彩/板　22.8×36.2 cm
Inv. 907.19.102　ランス美術館
© MBA Reims 2019/Photo : C.Devleeschauwer

デュプレは家業の磁器工場で絵付けの仕事に従事した後、パリで17世紀オランダの風景画を研究、また旅先のイギリスでジョン・コンスタブル（1776–1837）などイギリスの風景画家の影響を受けました。バルビゾンには1830年代に滞在しましたが1952年、親しくしていたテオドール・ルソーが先にレジオン・ドヌール勲章を受章したことでルソーと決別、バルビゾンからパリ北西オワーズ川沿いのリラダンに移りました。

h. コンスタン・トロワイヨン （1810–1865）
❻《ノルマンディー、牛と羊の群れの帰り道》

1856年　油彩/板　46.2×60.8 cm
Inv. 907.19.234　ランス美術館
© MBA Reims 2019/Photo : C.Devleeschauwer

トロワイヨンは、バルビゾン派の画家の中でも、動物を描いた画家として知られています。1847年にオランダとベルギーを旅行、パウルス・ポッテル（1625–1654）といった動物画家やアルベルト・カイプ（1620–1691）のように風景に動物を描き込んだ17世紀オランダの画家の影響を受け、以後、場面に牛や馬、羊がいる風景画を描きました。ノルマンディー地方はフランスの北西部に位置し、その景観が多くの風景画家に愛された地域です。

※❶〜⓫広報用貸出画像

第3章 画家＝版画家の誕生
L'avènement des peintres-graveurs

写真の技術が広く普及し向上するまで、絵画の複製には版画の技法が用いられていました。18世紀以前、こうした複製版画は画家の原画を元に専門の彫り師が版を作成していましたが、19世紀にはいると画家自ら版を作成するようになり、カミーユ・コローやバルビゾン派の画家たちも版画を自ら作成しています。彼らが好んで用いたのが、線が彫りやすく自由な描線表現が可能なエッチング（腐食銅版画）と、自然光の微妙な明暗表現に適したクリシェ＝ヴェール（ガラス版印刷）でした。こうして作成された画家自身による複製版画やオリジナル版画は、新聞や雑誌などの印刷物を介して広まり、風景画の普及と発展に貢献しました。

i. | j.

i. シャルル＝フランソワ・ドービニー
(1817–1878)
❼《カラスのいる木》
1867年　エッチング/紙　21.7×29.9 cm　個人蔵

j. ジャン＝バティスト・カミーユ・コロー
(1796–1875)
《物思いにふける人（夕暮れ）》
1854年　クリシェ・ヴェール（ガラス版印刷）／紙
14.8×19.7 cm　個人蔵

Column

エッチング（腐食銅版画）
銅の板を酸に強い膜でおおい、線を描きたい部分を先がとがった道具で取り除いて銅を露出させる。その後、銅板を酸に浸すと、露出した部分は化学的作用で銅が腐蝕し、描いた線に沿って溝が出来る。膜を取り除いた後、この溝にインクを詰めて紙をのせ、圧力をかけてインクを刷りとる。直接版に彫るよりも抵抗が少ないため、自由な線を表現することが出来る。

クリシェ・ヴェール（ガラス版印刷）
ガラス板の片面を、光を通さない塗料でコーティングする。針などで線を描きたい部分のコーティングを剥がし、ガラスを露出させる。感光紙とこのガラス板を重ね、ガラス板に光を当てると、ガラスを露出させた部分は光を通すため、線が感光紙に写る。光の加減で描写できることから、自然光の微妙な濃淡を表現することができる。

第4章 ウジェーヌ・ブーダン
Eugène Boudin

ウジェーヌ・ブーダンは、フランス北西部ノルマンディー地方にあるオンフルールに生まれ、近郊の港町ル・アーヴルで幼少期を過ごし、コンスタン・トロワイヨンやジャン＝フランソワ・ミレー(1814-1875)など、先代の風景画に触れるなかで画家となることを目指しました。パリでの修行を終えた後は、ノルマンディー沿岸を中心に、船や海景を描くため戸外制作を積極的に行い、刻々と変化する光や空の表情をカンヴァスにとどめようとします。変化に富む空模様を捉えたその作品を評価したカミーユ・コローは、ブーダンを「空の王者」と呼びました。また「雲の繊細さに到達すること」を目指し戸外制作を重んじたブーダンの態度に感化された青年時代のクロード・モネは、やがて印象派の中心を担うようになります。ブーダンの制作態度や自然へのまなざしは、バルビゾン派と印象派との橋渡しとなりました。

k. | l.
m.

k. ウジェーヌ・ブーダン　(1824–1898)
❽《ベルク、出航》
1890年　油彩/カンヴァス　79×110.2 cm
Inv. 907.19.34　ランス美術館
© MBA Reims 2019/Photo : C.Devleeschauwer
フランス北部の海岸都市ベルクを描いたブーダン晩年の作品です。白い雲が広がる穏やかな空の下、白波の立つ海上には幾艘もの帆船が浮かんでいます。水平線を低く取り、空を画面に大きく取り込んで、ゆったりと動く雲の動きや微妙な陽光の様子を捉えた描写は、まさに「空の王者」と呼ばれたブーダンの鋭敏な感覚を示しています。波しぶきを表す生き生きとした筆さばきは、印象派の表現に通じるものです。

l. ウジェーヌ・ブーダン
《ベルク、船の帰還》
1890年　油彩/カンヴァス　79×109.6 cm
Inv. 907.19.35　ランス美術館
© MBA Reims 2019/Photo : C.Devleeschauwer

m. ウジェーヌ・ブーダン
《ボルドーの港、シャルトロン埠頭の眺め》
1875年　油彩/カンヴァス　54.5×90.5 cm
Inv. 907.19.29　ランス美術館
© MBA Reims 2019/Photo : C.Devleeschauwer

※❶〜⓫広報用貸出画像

第5章

印象主義の展開

Le développement de l'impressionnisme

19世紀にも依然として存在していたアカデミーの伝統的な規範において、「風景画」は絵画ジャンルのヒエラルキーのなかで下位にありました。そうしたなか、カミーユ・コローやバルビゾン派、ウジェーヌ・ブーダンに倣って積極的に戸外制作を行ったクロード・モネ、ピエール＝オーギュスト・ルノワール、カミーユ・ピサロら若い世代の画家たちは、自らの眼を通じて捉えた風景を生き生きと描き出していきます。近代化を遂げたパリの都市景観に加え、近郊のフォンテーヌブローの森やノルマンディー沿岸各地の風景が、彼らの画題となりました。彼らの絵は、筆触分割による明るい色彩と大胆にも残された筆跡を特徴とします。しばしば「未完成」だと非難され、サロン落選を繰り返した彼らですが、1874年、自由な作品発表の場を求めてグループ展を開催します。彼らの革新的な表現は、後に「印象派」と呼ばれ、近代絵画の歴史に大きな転換をもたらすことになるのです。

n. | o.
p. | q.

n. カミーユ・ピサロ （1830–1903）

❾《ルーヴル美術館》

1902年　油彩/カンヴァス　46.3×55.6 cm
Inv. 907.19.208　ランス美術館
© MBA Reims 2019/Photo : C.Devleeschauwer

1900年にシテ島に移り住んだピサロは、そこから見えるルーヴル美術館とセーヌ川にかかる芸術橋を望む景観を連作形式で描きました。晩年に描かれた本作では、空をほのかにピンク色に染める柔らかな陽光や、湿度さえ感じさせる空気感が捉えられています。ピサロがジョルジュ・スーラ（1859-1891）らの点描主義やポール・セザンヌ（1839-1906）の表現に接近した後、再び印象派の様式に回帰した時期の作品です。

o. アルフレッド・シスレー （1839–1899）

《カーディフの停泊地》

1897年　油彩/カンヴァス　54.1×65.4 cm
Inv. 907.19.233　ランス美術館
© MBA Reims 2019/Photo : C.Devleeschauwer

1897年夏、病身を押して訪れたウェールズ南部の港町カーディフで描かれた、シスレー晩年の作品です。ペナースの停泊地と桟橋を見下ろす断崖から描かれ、構図の中心を占める大木の下に小さく描きこまれた妻と娘の姿は、この風景を豊かにするアクセントとなっています。軽快な筆触は、風に揺れる樹木や地面に生える草の動きを捉え、遠方では、穏やかな海と空が霞によって一体化しています。

p. クロード・モネ （1840–1926）

❿《ベリールの岩礁》

1886年　油彩/カンヴァス　65.6×81.5 cm
Inv. 907.19.191　ランス美術館
© MBA Reims 2019/Photo : C.Devleeschauwer

1886年秋、ブルターニュ沿岸の島ベリール（「美しい島」の意）に滞在したモネは、切り立つ岸壁やそこに打ち付ける波をモティーフに、この地に残る手つかずの自然を描きました。1880年代のモネは、時間の推移によって生み出される光や大気の変化に関心を持ち、同じ構図で何枚も描く連作形式を確立していきます。本作では、荒々しい岩肌や色鮮やかな水面が崖の上から俯瞰して捉えられ、明るい陽光が作り出す光と影の強烈な対比や、きらめく色彩が印象的です。

q. ピエール＝オーギュスト・ルノワール （1841–1919）

⓫《風景》

1890年頃　油彩/板に裏打ちされたカンヴァス
23.4×33 cm　Inv. 949.1.61　ランス美術館
© MBA Reims 2019/Photo : C.Devleeschauwer

※❶〜⓫広報用貸出画像

クロード・モネ
《ベリールの岩礁》(部分)
1886年　油彩/カンヴァス　65.6×81.5 cm
Inv. 907.19.191　ランス美術館
© MBA Reims 2019/Photo : C.Devleeschauwer

プレスお問い合わせ
「風景画のはじまり コローから印象派へ」展 広報事務局（ウインダム内）
〒103-0014　東京都中央区日本橋蛎殻町1-28-9 ヤマナシビル4階
TEL：03-6661-9447　FAX：03-3664-3833　MAIL：sompo-m-pr@windam.co.jp